

愛の骸

灰色狼

「幸輔くん？ どうしたの、ぼーっとして？」

「ああ、ごめんごめん」

レミに呼びかけられ、意識が戻る。

彼女とのデートだというのに、物思いに耽りすぎてしまっていたようだ。

僕とレミは今、喫茶店のテラス席で休息をとっている。

「ううん、昨日までレポート書いてたんでしょ？ お疲れ様です。ごめんね、わざわざ連れ出しちゃって」

そう言っ、レミは困ったような笑みを浮かべる。

口元で掌を合わせる些細な仕草さえ、レミの魅力をさらに引き立てる。

うん、かわいい。可愛すぎる。

「気にしなくていいって。約束は先週からしてたわけだし、サボってレポートやんなかった俺の落ち度だよ」

俺は早口でまくしたて、注文していたカフェラテをごくりと飲み込んだ。

しまった。一気飲みなんてはしたくない。しかもまだ店に入って間もないというのに。レミと話しながら少しずつ、少しずつ飲むつもりだったのだ。

少しでも長く、レミとお話ができるように。

失態にあせる俺の心中などどこ吹く風、レミはくすりと笑って、

「焦らない、焦らない。口にクリームついてるよ？」

身体を乗り出し、髪をかき上げ、ハンカチで口元を吹いてくれた。

レミの顔が近づき、ほのかに甘い香りが鼻腔をくすぐった。

顔が熱い。俺の瞳はレミの顔を避け、ぐるぐると彷徨う。

「あ、ありがとう……ごめん」

「やっぱり、幸輔くんは面白いねえ♪」

そんな俺を見て、レミはにやにやと笑うのだった。

いつの間にか時は過ぎ、俺はレミと並んで並木道を歩いていた。

「ここ来るのも久々だねえ」

「ん、前来た事あったっけ？」

どうも思い出せない。そんな俺の反応に、ユキはわざとらしく頬を膨らませた。

「幸輔くんったら！——で来たじゃない！」

「えっ……？ あ、そ、そうだったね、ごめんごめん」

一瞬、ユキの声がまるで厚いガラス越しの声みたいにくぐもって聞こえなかった。

聞き直そうかとも思ったが、機嫌を悪くさせたくなかった。

「許さぬぞ、デコピンじゃー！」

「ちよ、ちよっと！ 悪かったよ！」

ユキはいつもマイペースで、ころころと表情を変える。

じゃれついているうちに、さっきの事などどうでもよくなっていた。

「日も暮れてきたねえ……今日はそろそろお開きかな？」

夕焼けが徐々に夜の紺に侵食されつつあった。

あつという間どころか、一瞬で、濃密な一日だった。

「そうだね、もう少し一緒にいたかったけど……残念」

俺の言葉を聞いて、何故かユキは笑みをこぼした。

「そんな寂しがり屋の幸輔くんにはボーナスステージ！ そおれ！」

「えっ、ちよっと!？」

突然、ユキはバッグから取り出した何かを俺に放つてきた。落としそうになるのをギリギリで受け止める。

「これは……？」

ピンク色のプレゼント箱。花柄のリボンが巻かれている。

頬を少し染め、ユキは口を開いた。

「遅れちゃってごめん……お誕生日、おめでとう」

「——！ ほ、ほんと!? あ、ありがとう！ 中見てもいい？」

俺の誕生日は少し前に過ぎていて、当日は予定が合わなくて会えなかったことを思い出した。SNS上でお祝いの言葉は貰っていたが、プレゼントを渡されるとは予想外だった。

「恥ずかしいけど……いいよ」

箱を開けると、そこには銀色に輝く時計が入っていた。

「ほら、前持ってたのは壊れたって言ってたじゃない」

「ま、マジ!? こんな貰っていいの!?」

「すぐ壊したりするんじゃないぞ?」

「当たり前だろ! 絶対に大切にするよ!」

俺は時計を落とさないようにそっと手に取り、左腕に巻いた。

横断歩道の手前までやってきた。

ユキの住むアパートは向かいにあり、ここでお別れとなる。

「それじゃ、また今度ねえ!」

「うん、また!」

信号が青に変わり、ユキは駆けだしていく。

途中でユキが立ち止まり、もう一度手を振ってきた。

一生懸命に大きく腕を振るその姿も健気で可愛い。

「全く……バイバイ!」

俺はユキからのプレゼントを見せるように、左腕を振り

返し、

「バイバイ! 幸す——」

しかし、ユキからの返事が返ってくる事は無く。

キイイイイイイイツ!

その声は、甲高いブレーキ音と鈍い衝突音にかき消された——。

「うわあああああああああああああ!?!」

自分自身の絶叫で目を覚ます。

全身に纏わりつく汗、シャツが肌に張り付いて気持ち悪い。

見渡せば、ここは俺の部屋。

今まで見ていたのは夢だったわけだ。

そして、そんなことは百も承知だ。

「おい! いるんだろ悪魔め! さっさと出てこい!」

俺は、一見誰もいないはずの天井の隅に向かって叫んだ。

『へいへい、わかってますよう〜』

くぐもった声と共に、普段から薄暗い天井の隅がさらに黒く染まり、やがてその影は人型を形成していった。

『お呼びかい？ ご主人様よ』

紫の髪をなびかせた、一見ただの少年のように見えるコイツこそ、真正正銘の『悪魔』。

俺と契約を交わした、本物の悪魔だ。

「話が違う！ どうしてあんな夢を見せた!？」

煮えたぎる怒りのままに、悪魔に詰め寄る。

『待った待った！ 俺様も予想外だったんだ、許してくれ』

「ふざけんな！ あの時の事をまじまじと見せつけやがって！」

『すまない、まさか触媒があそこまで夢に影響するとは思わなんだ！ だって今日使ったのは、さっきの『時計』だろう？』

「! ……ああ、そうだ」

あの夢は、完全に空想というわけではない。

過去に俺が体験したこと。

元氣だったあの頃のユキは、もういない。

『お前さんが時計に込めた念や、想いが強すぎたんだな。

それで過去の回想が混じっちゃったみたいだ』

「チッ、まあいい……次の『贄』を使うだけだ」

ユキを失ったあの日から、俺の人生は一転した。

あの笑顔が、ユキの存在だけが生きる意味と言っても過言ではなかった。

ユキのいない世界なんて、生きていても仕方ない。

『ちよおっと待った、死ぬのはまだ早いんじゃないかい？』

死を考えていたそんな時、悪魔が俺に囁いた。

『このハサミを使ってみてよ、これで恋人との思い出を切り裂けば、それを触媒にリアルな『夢』を見せてあげられる、何もお前さんの寿命を奪おうってんじゃないだ、いい話だと思わないかい？』

悪魔だろうが何だろうが、もう一度ユキと一緒にいられるなら、そんなことはどうでもよかった。

手始めに、携帯に残っていた写真をプリントアウトし、

それをハサミで切った。

「幸輔さんと初デート……緊張するなあ、えへへ」

夢の中で出会ったのは、限りなく本物のユキだった。夢だと言われなければわからないくらい——悪魔の提案に、俺は心から感謝した。

真っ暗だった俺の心の中に、一筋の光が差した。

だが、切った写真はデータごと消滅してしまった。

データだけでなく、思い出の中の記憶も削れていった。

でもいい。写真はいくらでもあるし、それ以外の品だけで有り余るほど持っている。記憶だって、夢の中で会えるなら安い対価だ。

ちよき、ちよき、ちよき。

家からほとんど出ず、俺はひたすらハサミで切り続け、眠り続けた。

「クソッ、他に何か……」

部屋中を漁りまわる。溜まったゴミ袋の中まで手を突っ込んだ。日が落ち、また昇るまで、何度も何度も。

「無い……無い……!?!」

しかし、いくら探してもユキを想起させるモノは出て来なかった。

『てことは、とうとう使い切っちゃったんだな……ざーんねん、これでもう元気なユキとは二度と会えないなあ?』

悪魔の軽薄な声が耳を通り抜ける。

ふざけるな、せっかくユキと再び会えたんだ。もう一度失うなんて嫌だ。

「何か、何かないのかよ!?!」

俺は悪魔に懇願した。しかし、奴はへらへらと笑うばかり。

『さあねえ……久々に病院へ行ってみるのもいいんじゃないかい? 何かあるかもしれないぜ?』

そうだ、部屋になれば外に探しに行けばいい。散らかったゴミをかき分け、俺は部屋を出た。

ユキは別に死んでしまった、というわけではない。

意識が戻らないのだ。医師は絶望的だと言っていた。

だが、目覚めないのなら、俺にとっては死んでいるのと同じだ。

「ユキ……」

何本ものパイプに繋がれ、ベッドの上で眠り続けるユキ。

肌は蒼白で、腕はもう骨と皮だけの状態だった。

俺も変わったように、ユキも変わってしまった。

夢の中のように、暖かな笑みを送ってくれることは、二度とない。

思わず視線を窓の方へ逸らした。あんな姿のユキは、見るに堪えない。

『モノは探したのか？』

「ああ、ここに来て一番に探したよ……何も、無かった」

俺の反応に、悪魔は不思議そうな表情を見せた。まるで、俺だけが誰にとっても自明な事実を理解できていないかのように。

『いやいや、ここにあるだろう？』

「は？ 何処だ!？」

『まあまあ落ち着け……そこだよ、そこ』

悪魔の指さす先は、ベッドの上。

「ユ……キ……?」

装飾品がないかよく見直してみるが、確かにそこには変わらず眠り続けるユキしかいなかった。

『お前にとって思い出が詰まっているなら、贄は何でもいんだよ』

「!?? で、でも……」

言い返そうとした、だが、喉の奥からは言葉の一つも這い上がってはこなかった。

『何たって『そのもの』だ、今までで最上の——極上の夢が見られる、それも飛び切り長い奴だぜ? 上手くいけば一生分見ていられる』

震える手がズボンのポケットに伸びる。

『遠慮する事は無い……それに、お前さんはベッドの上のユキを見て思わなかったかい? こんな動きもしない人形より夢の中のユキの方がいいって』

冷たいハサミの感触が掌に伝う。

「人、形……」

『そうだ。お前さんにとって死んでいるのも同じなら、そりゃあ人形だよ……その人形の先に、『本物』のユキが待っているぜ？』

それきり、悪魔は語らなかつた。

足を引きずるように動かし、ベッドの傍まで近づく。

「ユキ……、そこにいるんだろう？ 俺はユキと一緒にじゃないといけないんだ」

頬に手を添える、その肌に暖かみは無く、ただ水のように冷たい。

「今まで気づかなくてごめん……でも、これからはずっと、一緒に、楽しく生きていけるから」

ポケットのハサミを引き抜く。

「痛いのは最初だけだよ、すぐにあの頃からやり直せる。だから、少し待ってて。すぐ会いに行くよ」

ハサミの取っ手を握りしめ、そして、

「――愛してるよ、ユキ」

力の任せるままに、刃を振り下ろした。

完